

宮崎パレット

-三原色から生まれる新たな色で-

産業、暮らし、自然

未来を描く-

昨今、技術革新によるライフスタイルや多様な価値観の変化の中で“多様性”が重要であると考えます。私たちは、地域にかつてから変化せずに残る価値を“三原色”と定義し、これからの多様な社会に対してランドスケープデザインの観点から、“三原色”を混ぜ合わせ新たな“色”を作るように幅広いライフスタイルに柔軟な21世紀型成長戦略のまちづくりを提案します。

1 現地調査：美しい色が失われつつある風景

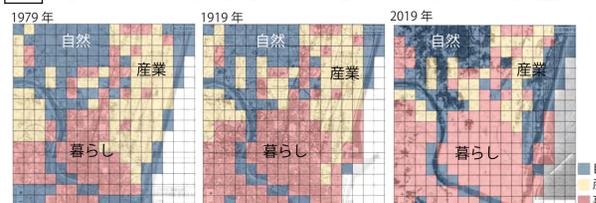
現地調査を通して、宮崎市の美しい風景の魅力は太陽に照らされた千変万化する色であると感じた。



その一方で、宮崎駅周辺の駐車場や遊休農地等のように、本来の宮崎市の魅力である色が失われつつあると感じた土地も多く見受けられた。



2 分析：土地利用から見る宮崎の三原色



①宮崎市の土地利用を見ると、河川や山、海、防風林などの自然環境、農業、漁業、林業、畜産業などの産業、低地に位置した暮らしがそれぞれが単一的に位置している。

②現代の宮崎市は自然・産業・暮らしの“宮崎の三原色”によって形成されたまちの大きな骨格が現在も変わらずに残っている。

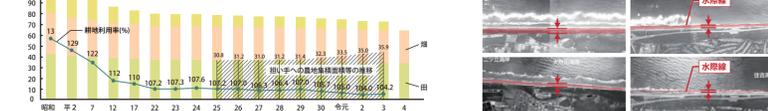
一方で、かつてと変わらない単一的なまちの骨格と、時代の流れの中で多様化した現代の生活の間で生じるズレによって、「失われる色」の課題がある。

3 課題：かつての単一的なまちの骨格により失われる色

単一的なまちの骨格と多様化したライフスタイルのズレによって①風景の色、②活動の多様性、色の2種類の「失われる色」の課題が生じている。

①風景の色：土地の“色”が薄れつつある場所

■農の色 担い手の減少による耕地利用率の低下から農の風景の色が失われつつある。

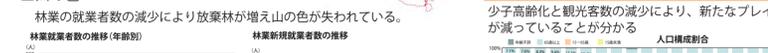


■まちの色 未利用地（駐車場）の増加により、無機質な風景の増加につながっている。

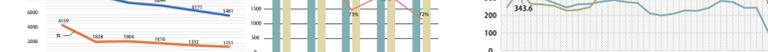


■暮らしの色 空き家の増加により暮らしの風景の色が失われる。

■山の色 林業の就業者数の減少により放牧林が増え山の色が失われている。



②活動の色：プレイヤーの“色”の減少 少子高齢化と観光客数の減少により、新たなプレイヤーが減っていることが分かる

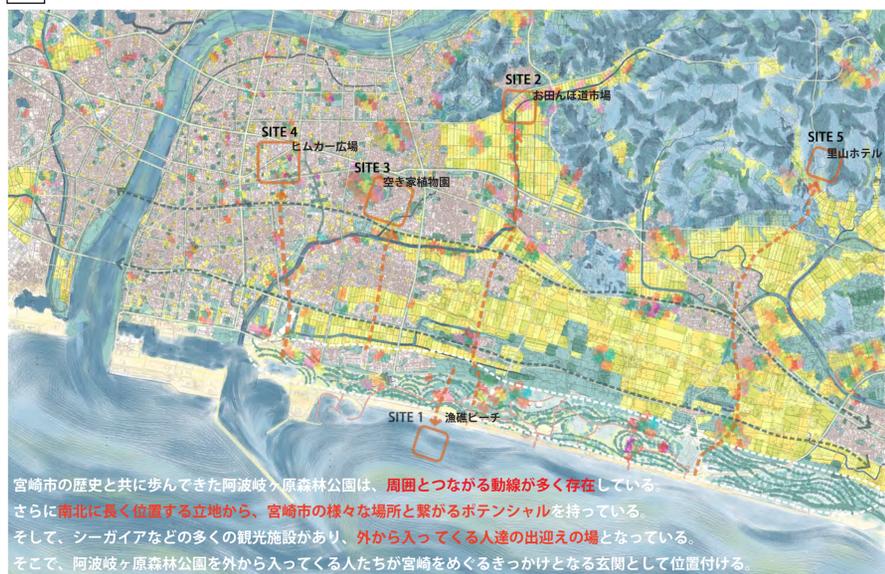


4 提案：色を生み宮崎市の未来を描く

本提案では、変わらない街の骨格とライフスタイルの変化のズレにより生じた“失われた色”を取り戻すために、宮崎の発展を支える三原色と捉えた『自然』・『産業』・『暮らし』を混ぜ合わせることで多様な“風景の色”と“活動の多様性”の2種類の色を生み、宮崎市の未来を提案する。



5 阿波岐原森林公園と周囲の地域の関係性

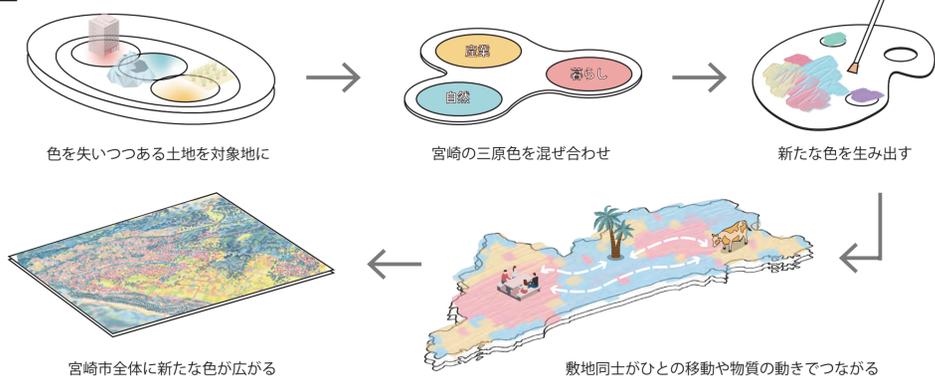


宮崎市の歴史と共に歩んできた阿波岐原森林公園は、周囲とつながる動線が多く存在している。さらに南北に長く位置する立地から、宮崎市の様々な場所と繋がるポテンシャルを持っている。そして、シーガイアなどの多くの観光施設があり、外から入ってくる人達の出迎えの場となっている。そこで、阿波岐原森林公園を外から入ってくる人たちが宮崎をめぐるきっかけとなる玄関として位置付ける。

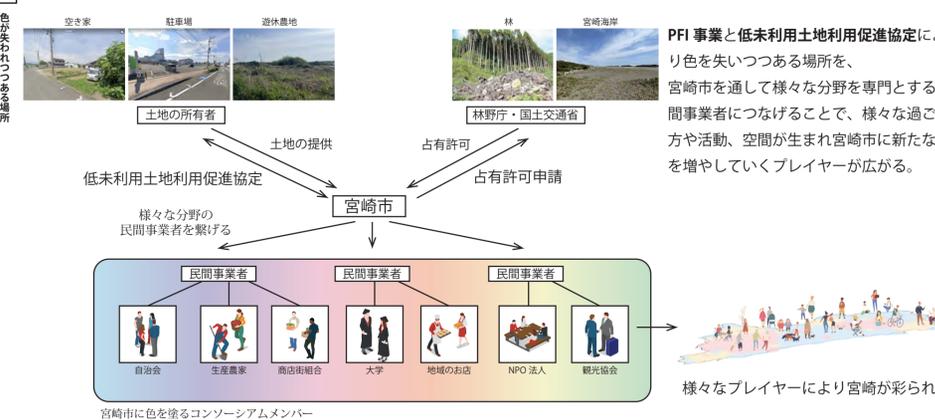
■“色”を大切にしまちづくりの歴史



6 設計手法：宮崎の三原色から生まれる新しい色



7 マネジメント：色を生み描くプレイヤー



Site0：日光の道標



■日時計の舞台



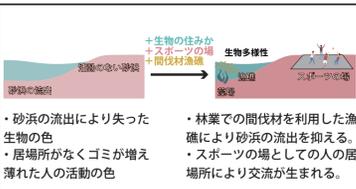
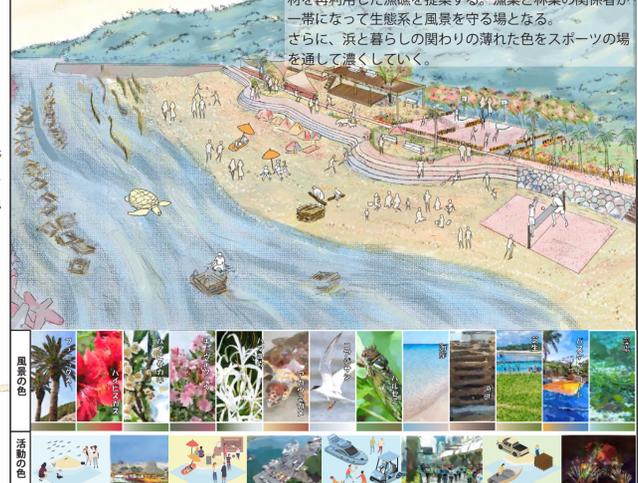
■木漏れ日のリビング



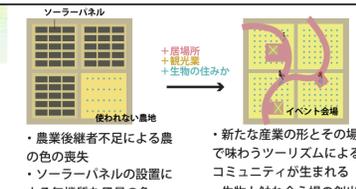
■日の出の回廊



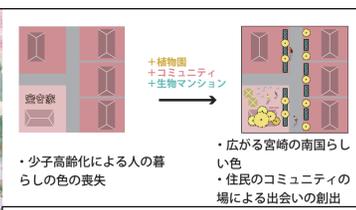
Site1：漁礁ビーチ



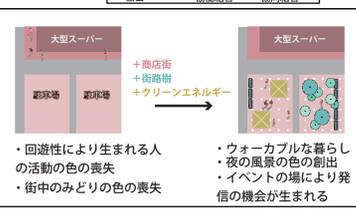
Site2：おたんぼみち市場



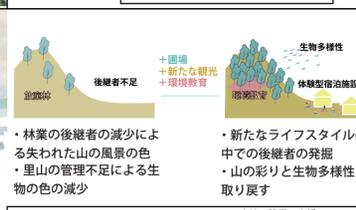
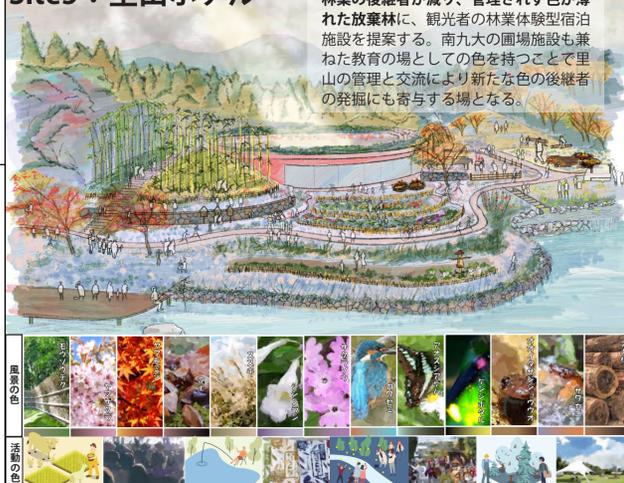
Site3：空き家植物園



Site4：ヒムカー広場



Site5：里山ホテル



8 様々な色が広がるウェルビーイングな未来の宮崎市の暮らし

